

英語力を伸ばしている学校はどんな学校か

—GTEC for STUDENTSスコアの分析から—

根岸 雅史(関東、東京外国語大学)
加藤 由美子(ベネッセ教育総合研究所)
森下 みゆき(ベネッセ教育総合研究所)
岡部 康子(株式会社ベネッセコーポレーション)

上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム2016

授業評価の難しさ

- ▶ 1回の研究授業で英語教育の評価ができるか
- ▶ 研究授業の評価は実証的であるか
- ▶ 学校英語教育の成否を1回の研究授業で判断していいか

研究設問

- ▶ 日本の高等学校英語教育において、どの程度英語力が高められているのか
- ▶ その程度は学校ごとにどのくらい異なるのか
- ▶ 英語教育の成果を上げている高等学校にはどのような特徴があるのか

研究手法

1. 英語力の指標としてGTEC for STUDENTSのトータル・スコアを用いて、英語力の伸長の著しい学校を特定
2. それらの学校の英語力の伸長の有り様を技能ごとに分析
3. 異なった学年群を見ることで、伸びの傾向が特定の学年の傾向なのか、ある程度一貫した傾向なのかも調べる
4. 伸長の著しい学校の英語教育のあり方を資料やインタビューに基づいて分析し、英語力の伸びの要因を探る

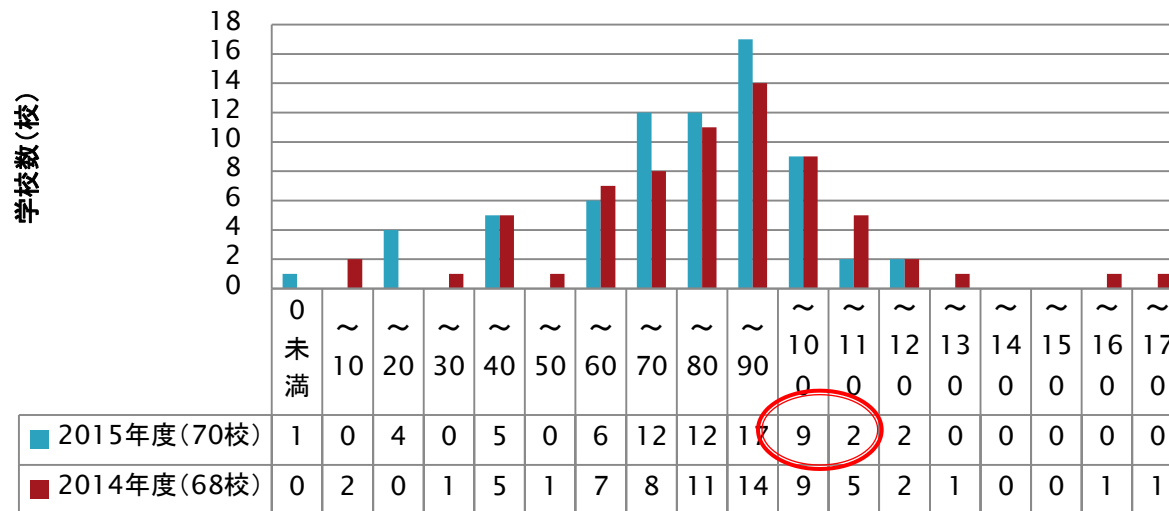
調査対象校

- ▶ GTEC for STUDENTSを学校単位で受験した高等学校のうち、1年次と2年次、または、1年次と3年次の2期間において受験している学校を調査対象校とする。
- ▶ なお、本調査では、小規模校の学校については対象外とし、受験者数100人以上の学校を今回の対象とした。
- ▶ さらに、なるべく公平な条件での比較を行うために、1) 受験人数の増減が10%以内、2) 学習日数が1年間または2年間±前後30日以内という条件で、学校を絞り込んだ。
- ▶ 前者の1年間の伸びを見た学校は2012-2013のグループと2013-2014のグループから成り、後者の2年間の伸びを見た学校は2012-2014のグループと2013-2015のグループから成っている。

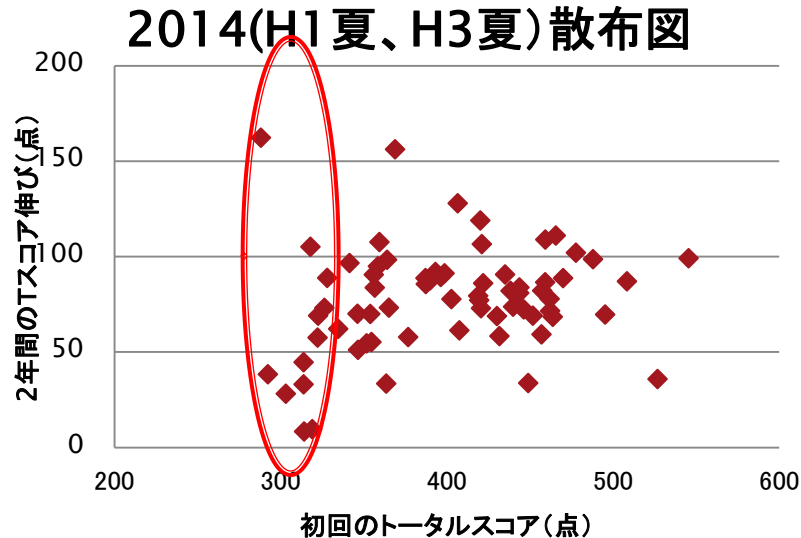
結果(1):トータル・スコアの伸びの実態 6

- ▶ 伸びの平均(2015年度)は71.1。スコアを1、2年で100以上伸ばしている学校がある一方で、得点の上昇のほとんどない学校もある。

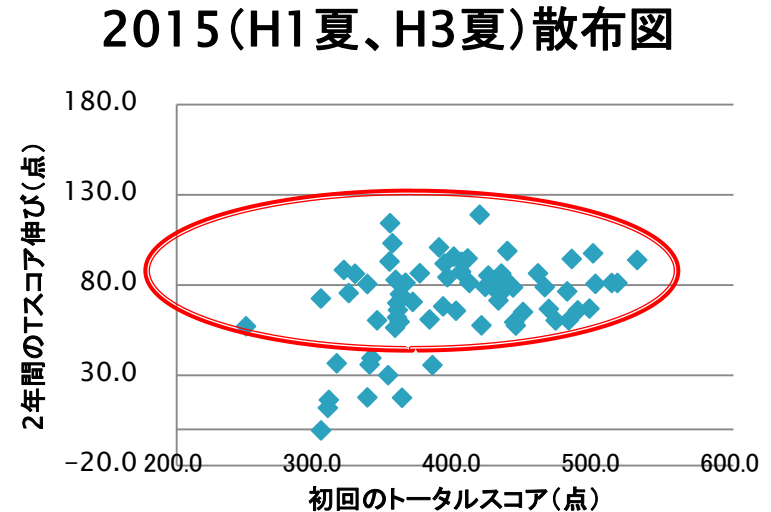
2年間のトータルスコアの伸び分布



結果(2): 出発点による伸びの違い



- ▶ 同じ300点からスタートしても、
- ▶ 0点から160点の伸びの違いが



- ▶ スタート地点がどこでも、
- ▶ 伸びにはあまり違いはない

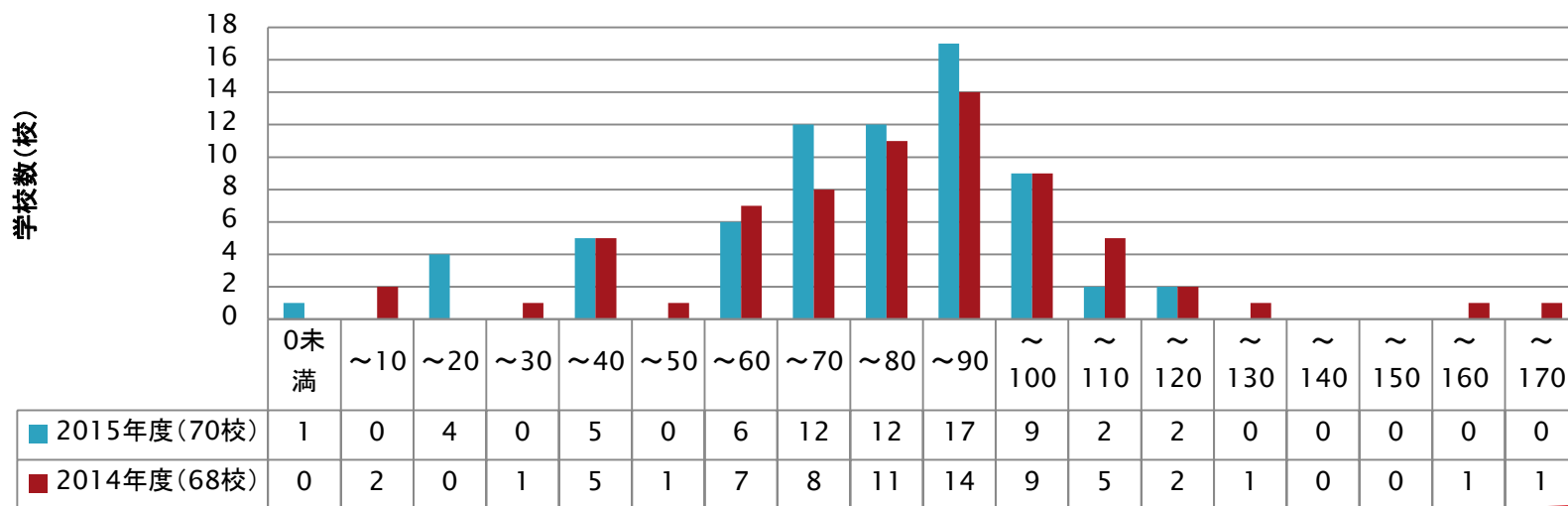
結果(3): 伸びている学校と伸びていない学校

- ▶ トータルスコアの伸びている学校
 - 技能のバランス: 3技能がバランスよく伸びている学校と伸びがアンバランスな学校がある
 - 伸びのパターンも様々
- ▶ トータルスコアの伸びのない学校
 - 一般的な特徴は、リーディングとリスニングはわずかに伸びているが、ライティングが落ち込んでいる

結果(3):トータルスコアの伸びている学校の抽出

- ▶ 伸びの平均(2015年度)は71.1。
- ▶ 釧路江南93.1(352.9→446.0)、大分上野丘94.5(483.9→578.4)、
- ▶ 田名部100.9(388.5→489.4)、
- ▶ 六日町103.2(355.0→458.2)、尾道東91.9(392.5→484.4)

2年間のトータルスコアの伸び分布

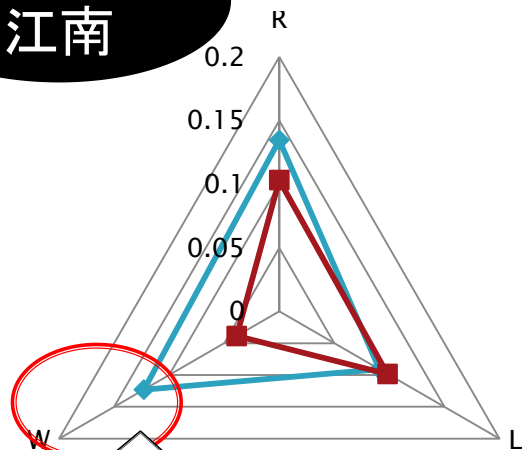


インタビュー実施校

学校名	ご協力をいただいた先生
北海道釧路江南高校	高橋知也先生、増井誠一先生、 加藤 渉先生(前)
大分県立上野丘高校	川野敬吾先生
青森県立田名部高校	堤 孝先生
新潟県立六日町高校	五十嵐俊樹先生、丸山祐一先生
広島県立尾道東高校	多賀由里先生

結果(3): 伸びている学校の伸びのバランス

釧路
江南

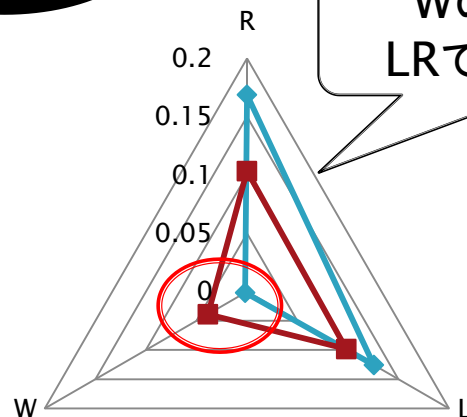


Wがかなりの伸び

田名部

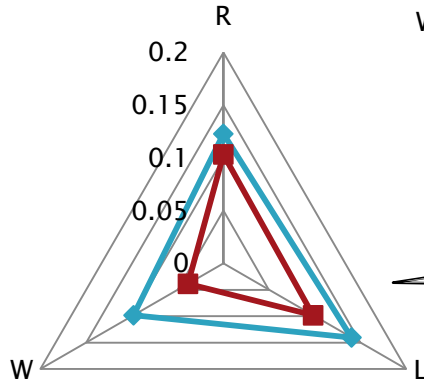
大分
上野丘

A校
平均



Wの伸びがなし
LRでかなりの伸び

B校
平均



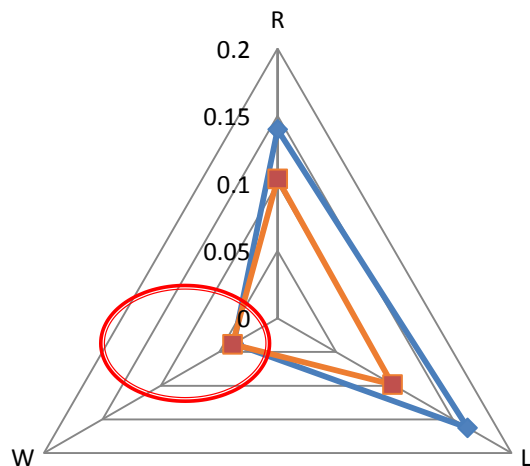
C校
平均

3技能平均的に
伸びている

2016/8/21 全国英語教育学会 根岸先生ご発表資料にC校を追加

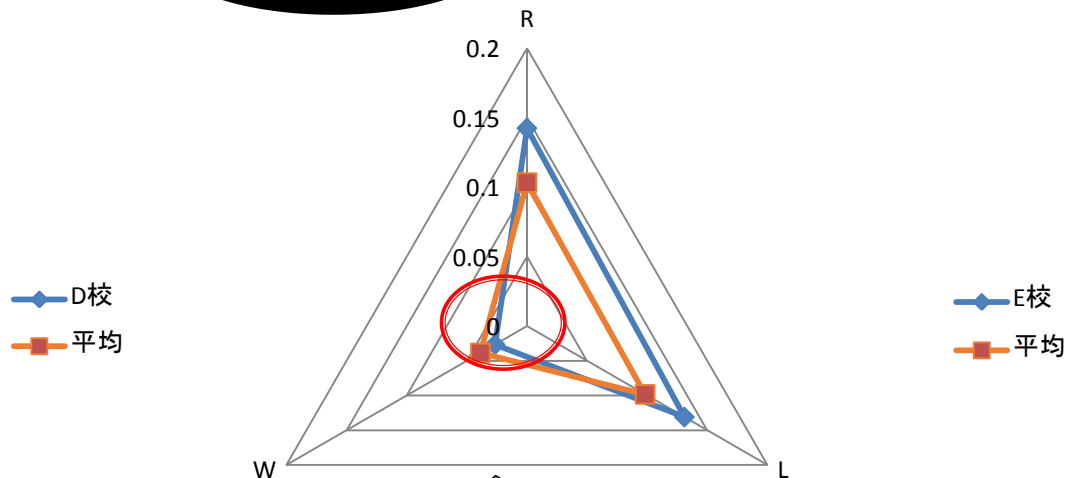
結果(3): 伸びている学校の伸びのバランス

六日町



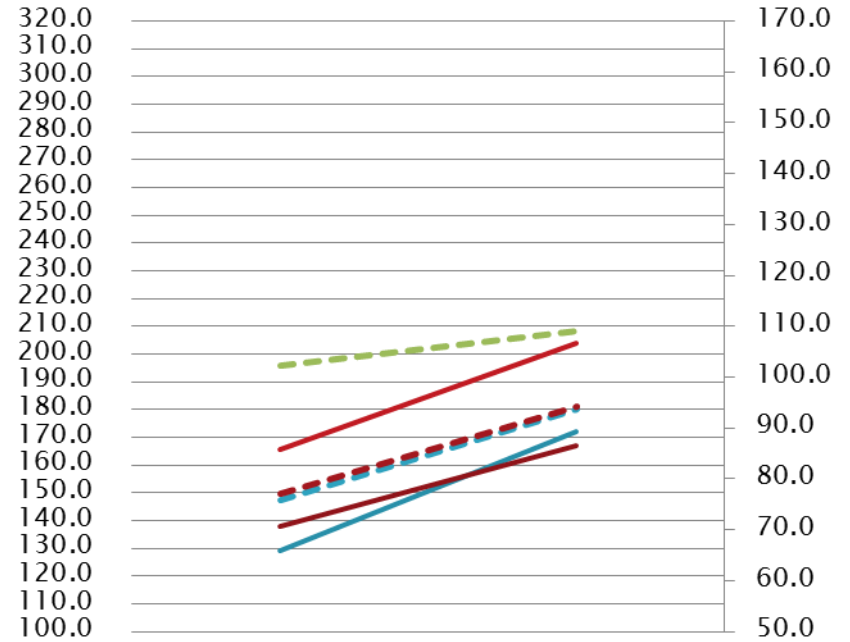
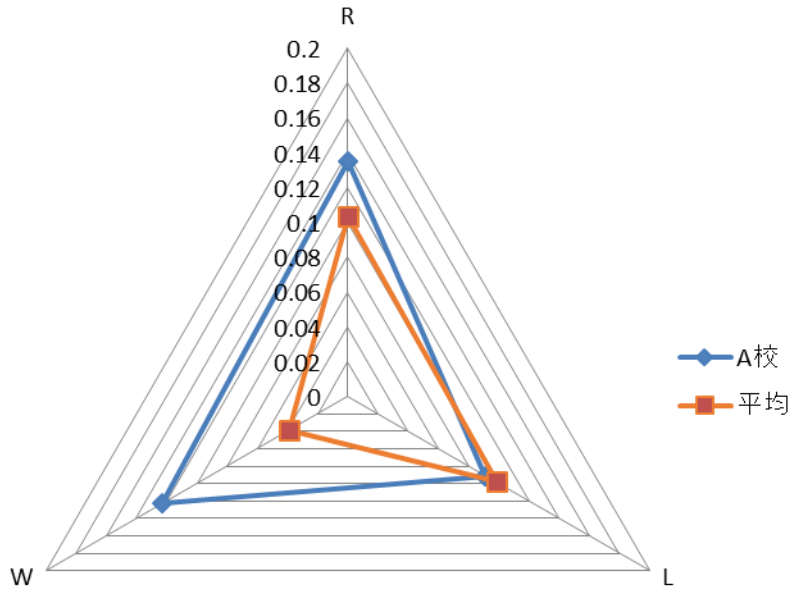
LRがかなりの伸び、
Wの伸びは平均並み

尾道東



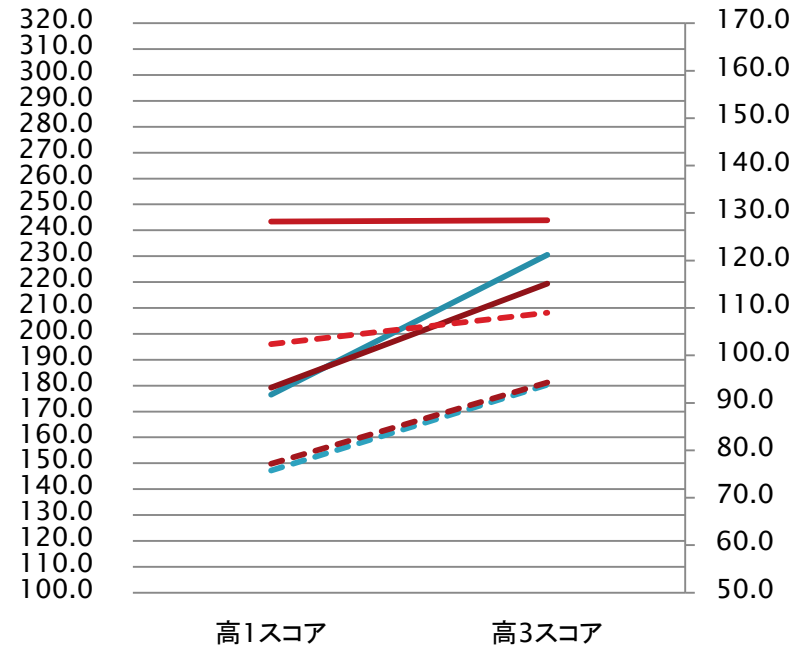
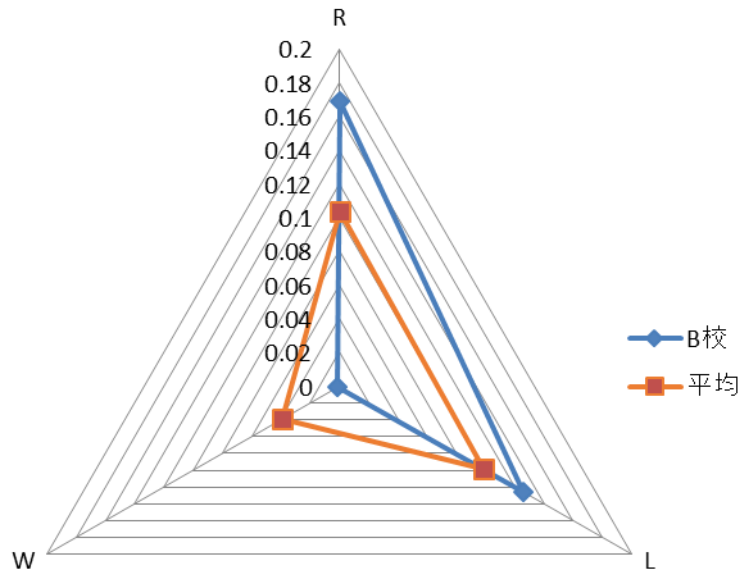
LRがかなりの伸び、
W伸びは平均よりやや低め

結果(3): 伸びている学校の伸びのパターン: 釧路江南



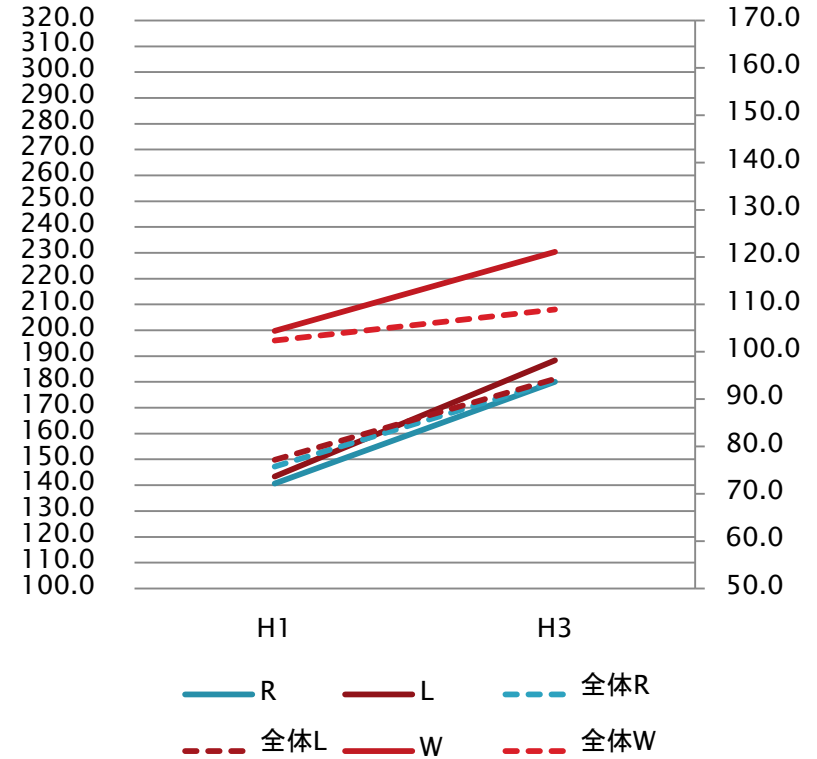
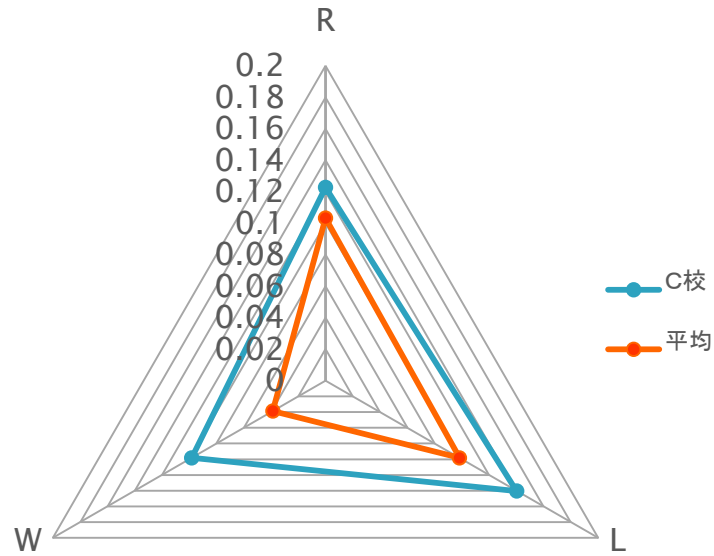
— R — L - - - 全体データR
- - - 全体データL — W - - - 全体データW

結果(3): 伸びている学校の伸びのパターン:大分上野丘

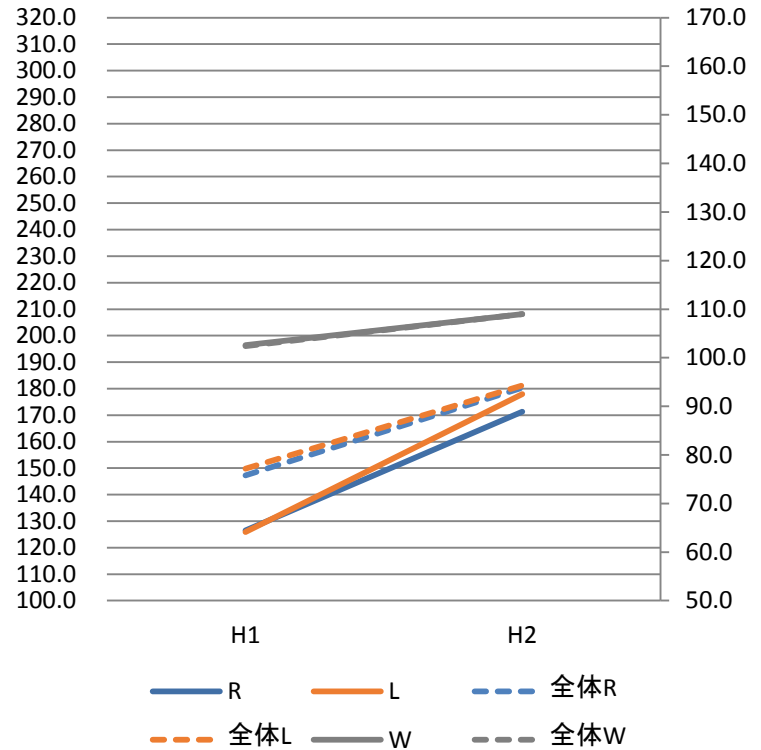
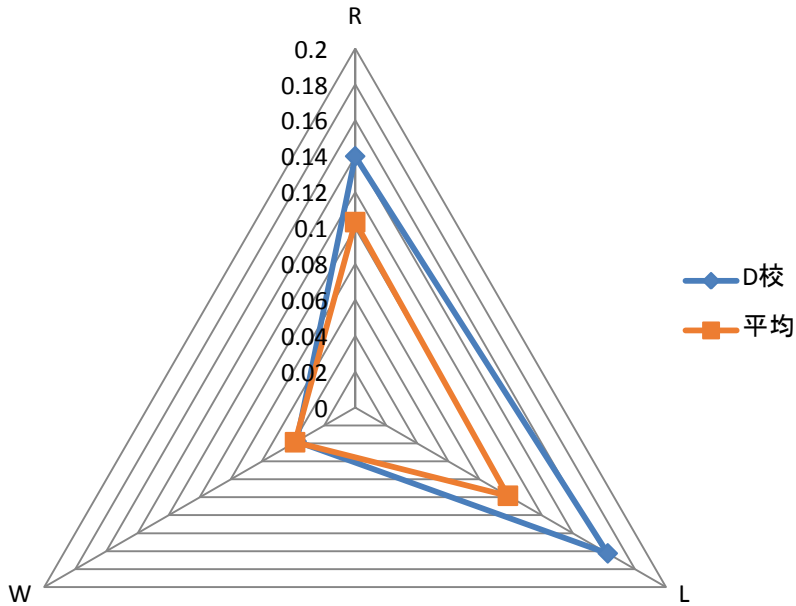


—◆— R —■— L - - - 全体データR
- - - 全体データL —■— W - - - 全体データW

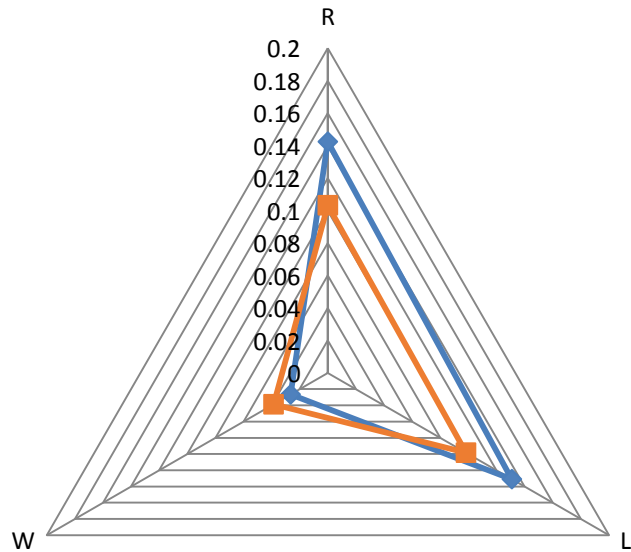
結果(3): 伸びている学校の伸びのパターン: 田名部



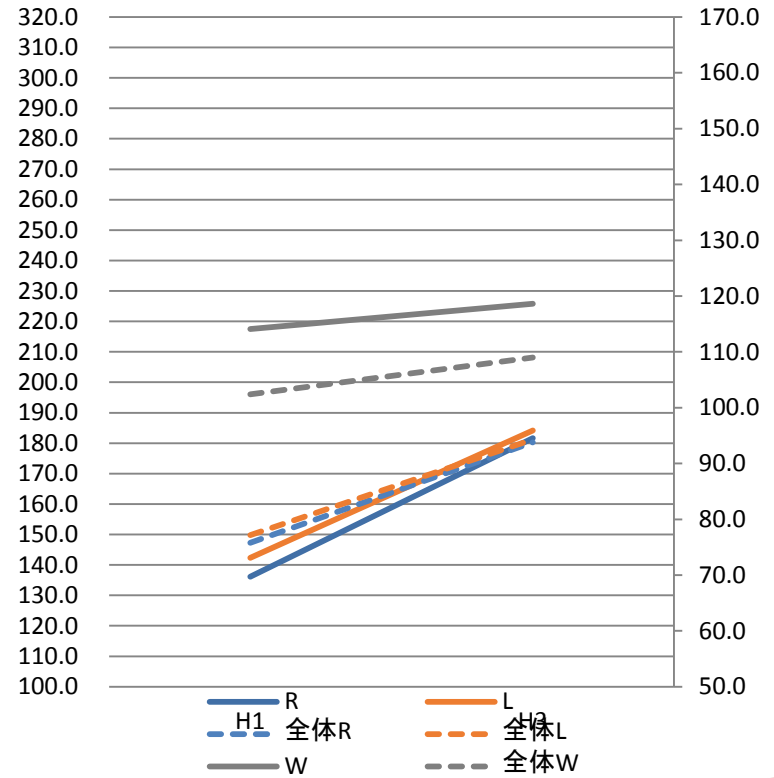
結果(3): 伸びている学校の伸びのパターン: 六日町



結果(3): 伸びている学校の伸びのパターン:尾道東



◆ E校
■ 平均



結果(4):インタビュー(釧路江南)

18

▶ 学校全体の取り組み

- 同僚性:目標(CAN-DOリスト)・指導法を共有、授業公開

▶ 授業

- 英語の授業は英語で。一文一文の和訳なし。

アウトプット:

- ・ライティング:まずはfluencyを優先
- ・スピーキング:小さなスピーキング活動をちりばめる

インプット:

- ・リーディング:授業は概要・要点理解
- ・リスニング:teacher talk+リスニング教材

結果(4):インタビュー(大分上野丘)¹⁹

▶ 学校全体の取り組み

- 同僚性:目標(CAN-DOリスト)・指導法(ワークシート)を共有、
- 科会が月2回 ・全英連やSGHなどの外的な要因

▶ 授業

- ・ 英語の授業は英語で。一文一文の和訳なし。

アウトプット:

- ライティング:まずは量を優先、継続的で頻繁なライティング活動
- スピーキング:継続的なスピーキング活動

インプット:

- リーディング:授業は形を変え教科書を何度も読ませる、家庭では Graded Readersの多読(2年間で20冊)
- リスニング:多読により言語処理能力が向上か?

結果(4):インタビュー(田名部)

- ▶ 学校全体の取り組み
 - 同僚性:授業パターンのモデル化、指導法(ワークシート)の共有
- ▶ 授業
 - ・ 英語の授業は英語で(授業をモデル化)。一文一文の和訳なし。
- ▶ アウトプット:
 - ライティング:継続的なライティング
 - スピーキング:小さなスピーキング活動をちりばめる、アウトプットにじっくり取り組む単元(年2回)を設ける
- ▶ インプット:
 - リーディング:概要理解から詳細理解へ、理解してから何度も読む
 - リスニング: Teacher talk、意味を理解しようとするリスニング(教科書、ペアワーク)

結果(4):インタビュー(六日町)

▶ 学校全体の取り組み

- 同僚性:指導法(ワークシート)の共有、科会(週1回)

▶ 授業

- ・ 英語の授業は英語で。一文一文の和訳なし。

アウトプット:

- ライティング:継続的なライティング
- スピーキング:話す活動を頻繁に取り入れる。パフォーマンステスト(学期に2~3回)

インプット:

- リーディング:概要理解から詳細理解へ
- リスニング:Teacher talk、授業(教科書)での活動。高2、高3は週1でリスニング教材使用。

結果(4):インタビュー(尾道東)

▶ 学校全体の取り組み

- 同僚性: 单元ごとゴールを検討。それぞれのワークシートは共有するがアレンジは各々。科会は週1回(時間割に組み込まれている)

▶ 授業

- ・ 英語の授業は英語で(SELHi、5年以上前より英語で授業)。一文一文の和訳なし。

アウトプット:

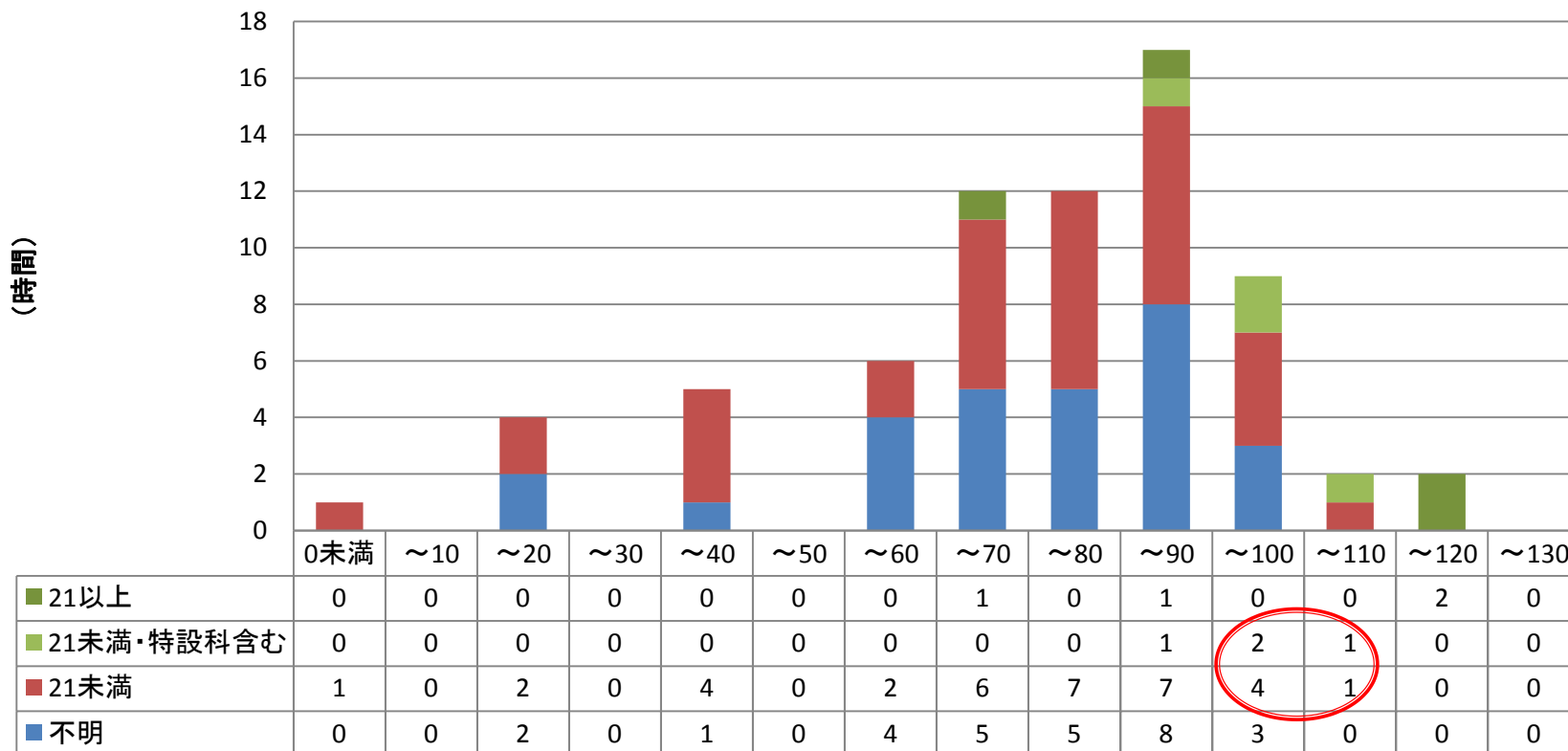
- ・ ライティング: 継続的なライティング
- スピーキング: 小さなスピーキング活動をちりばめる、年度で事前事後のパフォーマンステスト

インプット:

- リーディング: 教科書本文の読み(リプロダクションできるまで)。課ごとにテーマに沿った投げ込み教材。
- リスニング: Teacher talk、授業(教科書)での活動がメイン。リスニング教材は高3のみ。

要因分析(1): スコアの伸びと授業時間数

2年間のトータルスコアの伸び(2015年度)・3年間の時間数



要因分析(2)

- ▶ 英語力を伸ばす学校の英語教育の特徴は、英語授業の「量」と「質」
- ▶ 英語に大量の授業時間数を充て英語力を伸ばしている学校がある一方で、授業改善などを通して「質」を高めることで、英語力を伸ばしている学校もある。
 - たとえば、3年間の英語の時間数が、私立、または、英語科等設置校などでは、25時間以上の学校がある。
 - それに対して公立の普通科では17-19時間ほどの学校が多い(文系の選択科目を入れて最大20前後)。
 - 公立で同じような授業時間数であっても、その伸びには大きな違いがあるケースもあり、それらの多くは、これまでに学校規模で様々な英語の授業改善につながる取り組みをしているところであることがわかった。

- ▶ 高校3年間の英語力の伸びには、学校間の格差がかなりある
- ▶ 英語力を伸ばす要因は、英語授業・英語学習の量と質
- ▶ 英語授業の肝
 - (実際に生徒が言語処理する)英語のインプットの量と質
 - (実際に生徒が言語処理する)英語のアウトプットの量(+頻度)と質
- ▶ 英語力を伸ばしている学校のさらなる分析→そのノウハウの共有
- ▶ 英語力を伸ばしていない学校のさらなる分析

A. 英語の授業の「質」

- ・授業は英語で行う
- ・Fluency(量・流暢さ)を経てAccuracy(正しさ)へ
- ・InputからOutputへ。Outputのために目的を持ってInputに戻る

B. 学校・英語科としての取り組み

- ・Essentialな先生の存在とよき同僚性
- ・環境変化や外的影響力をてこにする
- ・長年(4~10年)に渡る試行錯誤と議論の積み重ね
- ・教員の自律性を担保しつつ、個別にぶれない目標・指導・評価のしくみ
- ・成果指標の活用

C. 生徒が英語学習に向かう土台作り

- ・生徒がより高い目標を志を持つための働きかけ
- ・生徒が英語学習に取り組みやすい共同体、学習を継続する支援
- ・生徒が学習成果と課題を自ら確認して、学び方を改善するための支援

D. 地域や学校の環境を踏まえた取り組み

- ・生徒の状況に合わせた指導や家庭学習
- ・生徒の伸びしろ(ポテンシャル)を最大にする進路指導や入試対応

授業は英語で行う

→生徒が4技能でたくさん英語を使う。一文一文和訳は行わない。

Fluency(量・流暢さ)を経てAccuracy(正しさ)へ

→生徒がAccuracyへの理解欲求を高め、学習効率も高める。

InputからOutputへ。Outputのために目的を持ってInputに戻る

→生徒がInputとOutputを行きつ戻りつしながら、言語形式・材料と内容の両面から意味理解、解釈・分析したことの表現を繰り返す(深い言語処理)。

Input:

概要から詳細理解へ。

教科書本文を目的(概要把握・音読・要約)を持ってたくさん読む。

Teacher talkやクラスメートの英語をよく聞く。

初めて触れる素材を聞く・読む。多読を行う。

Output:

まずは量を優先してどんどん表現する。

読んだり聞いたりしたものについて要約や考えを話す・書く。

小規模な話す活動を継続的に行う。

ディスカッション・スピーチの大きな活動は学期か年に数回行う。

要約や考えで話したことを書く。

A. 英語の授業の「質」

* 活動の目的が明らかにつながっている授業

* 授業中は生徒が忙しい授業

* 生徒が「深く」学んでいる授業

Essentialな先生の存在とよき同僚性

- 授業や生徒の学びを変えたい先生の存在(役職ではない)とチャレンジ
- 中堅・若手教員のチャレンジをサポートするベテラン教員

環境変化や外的影響力をてこにする

- 新教育課程への柔軟な対応
- SELHi、英語教育強化地域拠点事業などの機会の活用

長年(4~10年)に渡る試行錯誤と議論の積み重ね

- まずは文法訳読から音読の取り入れ、英語での授業、生徒の学び中心授業へ
- 英語科内での目線合わせレベルからみんなのできるしくみの構築、授業公開

教員の自律性を担保しつつ、個別にぶれない目標・指導・評価のしくみ

- 英語科教員(一部学校管理職も交え)で目標の方向性共有、指導と評価の実践、振り返りのサイクルを回す。教員の異動があっても継続するしくみへ。
- 目標: 生徒の具体的な4技能活用イメージ(育てたい力)の共有 → 指導・評価へ
- 指導: ワークシート(指導ステップ)、活用素材の共有 → 教員オリジナルな授業へ
- 評価: 評価計画(観点)の共有 → ペーパーテスト・パフォーマンステストへ

成果指標の活用

- GTEC for STUDENTSや模擬試験結果を英語科で分析・共有

A. 英語の授業の「質」

- ・授業は英語で行う
- ・Fluency(量・流暢さ)を経てAccuracy(正しさ)へ
- ・InputからOutputへ。Outputのために目的を持ってInputに戻る

B. 学校・英語科としての取り組み

- ・Essencialな先生の存在とよき同僚性
- ・環境変化や外的影響力のてこいれ
- ・長年(4~10年)に渡る試行錯誤と議論の積み重ね
- ・教員の自律性を担保しつつ、個別にぶれない目標・指導・評価のしくみ
- ・成果指標の活用

C. 生徒が英語学習に向かう土台作り

- ・生徒がより高い目標を志を持つための働きかけ
- ・生徒が英語学習に取り組みやすい共同体、学習を継続する支援
- ・生徒が学習成果と課題を自ら確認して、学び方を改善するための支援

D. 地域や学校の環境を踏まえた取り組み

- ・生徒の状況に合わせた指導や家庭学習
- ・生徒の伸びしろ(ポテンシャル)を最大にする進路指導や入試対応

C.生徒が
英語学習に
向かう
土台作り

生徒がより高い目標を志を持つための働きかけ

→授業開きの実施や訓・ルール・学年通信の配布

生徒が英語学習に取り組みやすい共同体、学習を継続する支援

→生徒の学び合い(教員からだけでなく他の生徒からも学ぶ)の雰囲気づくり

→活動の折に触れた実行ポイントの声かけと励まし

生徒が学習成果と課題を自ら確認して、学び方を改善するための支援

→外部試験実施後の学び直し、返却会での結果数値の捉え方、学習改善の提案

D.地域や
学校の
環境を
踏まえた
取り組み

生徒に状況に合わせた指導や家庭学習

→生徒が家庭学習をあまり行わない学校:授業中の学習の質を高めて効果を最大に上げる(予習を前提としない)

→生徒が家庭学習を行う学校:自分で選んだ本の多読とアウトプットなどの自律的学習の機会を与える。

生徒の伸びしろ(ポテンシャル)を最大にする進路指導や入試対応

→身近な進学希望先に留まりがちな生徒にもっと外の世界があることを伝える。

→高1から英語で進める活動型の授業を行い、高2の終わりから超難関国立大二次試験対応の和訳も行う。

田高英語 十箇条：高1生が入学した時に渡す心構え

田高英語 十箇条

- 一. 自分の弱点を見つけ自分で学ぶことができる自立したカッコいい人間になるべし
- 二. 国際的な広い視野で物事をとらえ、できることから行動できるカッコいい人間になるべし
- 三. 映画や音楽、テレビ番組など身の周りにあふれている英語に積極的に触れるべし
- 四. 8年後には世界の人々と一緒に、地球のどこかで英語を使って仕事をしていることを肝に銘ずるべし
- 五. 自分と違う考えを尊重しながら、自分の意見を述べられるカッコいい人間になるべし
- 六. たとえ親の敵とペアになっても、クールにかっこよく協力して活動に取り組むべし
- 七. チャイムとともに授業を始められるように、万全の準備としておくべし
- 八. 釜臥山が噴火しても提出物は期限を厳守するべし
- 九. 自分の努力できる才能を信じるべし
- 十. 豊かな想像力&創造力と適切なユーモアを持つべし

「大切なのは遊び心。
間違えてもおもしろいことを
言うrisk-takerを育てたい。」
(堤孝先生)



英語力を伸ばしている学校：大分県立大分上野丘高等学校

多読プログラム

- ・1ヶ月に約1冊のペース
- ・教師が読ませたいと思う本を全員購入
- ・毎日指定されたページを読み、記録用紙を提出
- ・授業の冒頭で、英問英答などで内容確認

* 大量のインプットで。自然で豊かな表現に親しむ

生徒アンケート

- ・毎日読んだ：23%
- ・ほぼ毎日読んだ：53%
- ・約半分読んだ：22%
- ・ほとんど読まなかった：2%

生徒に人気の多読作品

・Billy Elliot	1年2学期
・Matilda	1年2学期
・The Body	2年2学期
・There's a Boy in the Birl's Bathroom	1年3学期
・Frozen(アナと雪の女王)	2年1学期
・Charlie and the Chocolate Factory	2年2学期



「GTECは他の人と比べるのではなく、過去の自分と比べるテストです。」
(六高1学年便り 第23号)

「全員が自己ベスト更新となるよう、これからも英語に取り組んでいこう！」
(六高2学年便り 第30号)

「六高生にはだれにでも得手不得手があります。六高生の弱点は英語です。でもゆっくりでも確実に力がついていきます。それを確かめる場としてGTECを受験していきます。次のテストは12月です。全員が次のグレード目指して笑顔でがんばっていきましょう。皆さんのがんばりに期待しています。」
(六高1学年便り 第38号)

六高1学年便り * 岡げ未知のとびら
第16号 2013/7/5

GTEC特集

GTEC for STUDENTS を実施します

来週7月11日(木)にGTEC for Studentsという検定試験を実施します。一体どんな試験なのか知らない人がほとんどだと思うので説明します。

- 1. GTEC for STUDENTS とは？
進研模試と同じく、ベネッセコーポレーションが実施する中高生対象の英語能力検定試験です。今の3年生が1年生の時から、年に2回(7月と12月)に実施しています。自分の英語力がどの程度ついているか、どの分野が強く、どの分野が弱いのか、などを総合的に把握できる試験です。
今回君たちに受けてもらうのはGTEC for StudentsのBasicのテストです。中学校から高校1年のここまで、どの程度の英語力が身に付いたかを測定します。
- 2. 英語学習の目標設定の場として
毎日の授業や小テスト、朝学習などを通して、皆さんの英語力は確実に向上しています。4月からの3ヶ月間だけでも、覚えた単語や読んだ英文量はかなりになります。しかし、定期テストや模試(来週の進研模試や全統模試など)では、受験する度に難易度が変化し、平均点も変わります。がんばって勉強したつもりでも、目標点に到達しなかったり、偏差値が上がらなかったりと、なかなか皆さんのがんばりが目に見える形で現れません。
GTECは、毎回同じ難易度の試験を年2回受験します。普段がんばっている人は、自然とスコアが伸びていくテストです。他の人と比べるのではなく、過去の自分と比べるテストです。
英語科では、1学年が終了するまでに、GTECでトータル380点(高校英語初級レベル)に全員が到達することを目標にしています。

「教科書の内容をゴールにしても何も頭に残りませんから。」(多賀由里先生)

「単元の終わりに、ディスカッション、ディベート、ロールプレイングなど、根拠を持って自分の意見を話す、書くといったやり取りを必要とする学習活動を組み込むと、『概要を理解し、要約する』ことを目標として掲げなくても、話す、書くために何度も教科書本文を読み直し、理解することが必要となり、結果的により深い読みが促される。また、話す、書く課程において、要約する必然性も生じてくる。さらに話す、書くために必要となる語彙・語法といった知識・技能を自発的に習得しようとする態度も育成される。」

(日本教材文化研究財団・調査研究シリーズNO.64「グローバル人材に求められる英語力の育成」平成28年9月：多賀由里先生)

